

# 御霊信仰の諸相

桂川 将成

(山崎ふさ子ゼミ)

## はじめに

人が怨念を抱いて死ぬと、その魂は怨霊と化し、災害や疫病を引き起こし祟ると恐れられていた。そしてそれらの怨霊を「御霊」神や守護霊として祭り、鎮めることで種々の厄災から逃れられるとも。これら一連の思想、行為を「御霊信仰」という。怨霊となった者は、何故そうならざるを得なかったのか、この信仰は社会にどのように影響を与えたのかなど、御霊信仰についていくらか調べたものをまとめて考えてみたい。

## 御霊信仰

### i 怨霊とは

御霊信仰とは、先に述べたように怨霊となった者の霊を畏怖し、それを鎮めることで、祟りを免れようとする信仰のことである。怨霊を広義で捉えると、死んで間も無くの靈魂の全てが、怨霊であるとされる。特に天災、疫病を単独で齎す強力な怨霊は御霊として恐れられた。怨霊は大きく分けて三種類あるとされ、まず新魂などと呼ばれる、死んで一年も経っていない鎮魂前の靈魂。これらは一周忌がすぎれば生まれ変わり怨霊ではなくなるのだが、何らかの理由で子孫や縁者に祭ってもらえない靈魂は餓鬼と呼ばれ怨霊のままさまよう、これが第二の種類とされる。そして三つ目が非業の死を遂げた者の靈魂であり、これを一般的に怨霊と呼び恐れられている。このあたりの分類などは五来重氏の論著（『現代人の宗教 6 命と鎮魂』所収「怨霊と鎮魂」1986 御茶の水書房）が詳しい。また、別の区別の仕方として、

人間が神とされるゆえんのもの、ただ人間であるだけのものではなくて、その社会生活において、特殊の存在である場合に限る。（中略）そういう靈魂の存在を強く信じてお

り、現実の生活だけでなく、神秘的な世界観を持っていたころのものにとっては、死後の靈魂の働き、ことにその災いを及ぼすような働きにまで偉大さを感じ、それに恐れを抱いたのである。偉人の崇拝ということもそういう怨霊の崇拝とも結び付き、むしろそうしたものでもあった。そこでこの怨霊はすべての死者にあるのではなく、そのうちでも特別な死に方をしたもの、またはその社会にも容れられなかったような人などの死霊である。

（日本歴史新書『神社』所収「人間神と怨霊神」より 1966 原田敏明著 至文堂）

というものもある。

御霊信仰自体は対象とする怨霊・御霊を限定しているわけではないが、主な対象となる御霊は非業の死を遂げた人物、それも政府高官や皇太子などの政治的失脚者が中心となっている。そうなっている理由には、その立場ゆえに非業の死を遂げたという話が広まりやすい、皇位争いや政治闘争などにおいて陰惨な話に事欠かない、偉人への崇拝と怨霊への崇拝は通じるものがあるから、大々的な祭りを実行できるのは時の権力者達であり、彼らが恐れる怨霊は自分たちが陥れた政敵が主であるから、などの理由であると考察できる。

### ii 御霊会

怨霊を鎮める為の祭りを御霊会と呼ぶ。記録上初めて御霊会が行われたのは、『三代実録』の貞観五年（863年）五月二十日の条に記されてある、平安京の神泉苑で執行されたものがそうだとされている。

『三代実録』は、さらに御霊会の起源に関しこのように説明している。「近代」以来疫病頻発し、死亡者が甚だ多いので、「天下」の人々はこの災厄は御霊のしわざであると考え

た（この天下の人々というのは、農民はもとより、これをリードする民間僧侶などの下層知識階級、冤罪を受けた者の一族縁者を指すと思われる）。そこで京畿を始め諸国に及び、「夏秋節」に至るごとに御霊会を修し、「往々にして断たず」（これは恒例行事化しつつある意味と思われる）。行事の内容は仏を礼し経を説き、あるいは歌舞が行われ、子供を化粧させ馬上射撃を競わせ、あるいは腕力のある者を選んで相撲をさせ、競馬を催し、あるいは仮装して芸を演じ、観衆は固唾を飲んで見物し、これが時代の流行となった。

『天神御霊信仰』 1996 村山修一著 塙書房

これは民間でなされていた祭りを中央政府が公認し、勅命によって実施された最初の例である。この時御霊として祭られたのは、崇道天皇（早良親王）、伊予親王、藤原夫人（藤原吉子）、橘逸勢、文室宮田麻呂の五人である（観察使・藤原広嗣を含む場合も）。

このような御霊会、鎮魂の祭りは飢饉や疫病の起こり易い（怨霊が暴れやすい）春の終わり、夏の終わり、土用の間などに行われ多少時期はずれたりしているものの今も行われているものもある。三月に行われる鎮花祭（やすらい祭）、六月（今は七月）の祇園御霊会（祇園祭）、八月（今は九月）の八幡宮の放生会、九月（今は十二月）の春日若宮のおん祭など。霊魂を祭り、芸能で鎮め、海や山や川へ流すというのが基本的な御霊会。京都の祇園祭では賀茂川へと流し大阪の天神祭では淀川へと流す。

### iii 怨霊となった者達

鎮め、流したくらいでは収まらないような強大な怨霊は神社に御霊神として祀ることになる。有名な怨霊としては先に挙げた神泉苑での御霊会で祭られた五人の御霊、崇道天皇、伊予親王、藤原吉子、橘逸勢、文室宮田麻呂、これに藤原広嗣を加えての「六所御霊」、ここにさらに吉備真備、火雷天神（普通は藤原道真を指すが、八所御霊として数える場合は他戸親王の方を数える）を加えて「八所御霊」と呼ぶ。これらの御霊は全て京都の上御霊神社と下御霊神社に祀られている。

崇道天皇（早良親王）は光仁天皇の皇子だったが、延暦四年（785年）に藤原種嗣が暗殺された事件の首謀者だとされ、乙訓寺に幽閉された。しかし、彼は罪を認めず、飲食を断ち、無実を主張、流罪地淡路国へ配される途中死亡（毒殺されたとも）、遺体は淡路で葬られた。その後、桓武天皇の夫人藤原旅子、母の高野新笠、皇后の藤原乙牟漏が相次いで死亡し、皇太子の安殿も病気に罹る。占いによって、延暦十一年（792年）六月十日、早良親王の祟りと出たため、親王への陳謝を行った。平安京への遷都の理由の一つが、この親王の祟りから逃れるためともされている。延暦四年（785年）から延暦十年（791年）にかけて大風による水害、早魃による飢饉、痘瘡などの疾病が大流行し、延暦七年（788年）には、大隅国の曾乃峯（霧島山）の噴火、延暦十九年（800年）には、富士山が噴火し、災禍が続いたため、同年早良親王に対し、崇道天皇と追称した。

伊予親王は桓武天皇の皇子であり、藤原吉子はその母であった。大同二年（807年）十月二十七日、藤原雄友（吉子の兄）が、伊予親王に謀反の疑いがあると藤原内膳に報告し、天皇は母子共々、大和国川原寺に幽閉した。そして食事も与えずに、母子共々服毒自殺に追いやった。この二人の御霊についてとくに噂されたりした様子はないのだが、そのことについては証告者である、式家藤原仲成、薬子が制裁を受け没落したことが関係していると思われる。

また、直接伊予親王等とは関係ないのだが、大同元年（806年）、畿内を暴風雨が襲い、山城国では大洪水が起こり、霖雨が続き凶作となった。大同二年（807年）には京中に疫病が流行し、大同三年（808年）には、いよいよ猖獗を極め、朝廷は使を遣わし京都内に放置されている死骸を埋葬、疫病沈静のため、諸大寺に大般若経を奉読させ、祈願している。だが翌四年（809年）より天皇自身も病に臥せり、ついには嵯峨天皇に譲位する運びとなった。

橘逸勢は下級官吏であり、承和九年（842年）七月十七日、承和の変（藤原良房が計画した政治的陰謀で、伴健岑等が謀反を企てたと逮捕され、計画に加わったとされた皇太子恒貞親王、藤原愛発等も追放された。恒貞親王廃太子事件ともいう）

に連座し逮捕された。杖で打たれ続ける拷問を受けた後、伊豆に流されることになったが、途中の遠江国で死去し怨霊となった。後に名誉回復し、仁寿三年（853年）には、従四位下に叙されている。なお、承和五年（838年）十月十四日、京都西山の南から北にかけて長さ30丈、幅4丈余りの白い虹が出現、同月二十二日から二十六日にかけて東南の空に彗星が出現、陰陽師がどちらも凶非と判断し、これを橘逸勢の祟りとした。

文室宮田麻呂も下級官吏で、謀反の疑いで承和十年（843年）に逮捕され、伊豆国に流された、その地で死亡したかどうかは、史料が残っていない。この事件は『三代実録』の記事以外に記録が残っておらず、真相は全く謎に包まれている。承和の変にからませて、失脚させることを企んだ陰謀であるとの説が有力で、その説を補強するかのように、後に御霊の一つに数えられるようになった。

藤原広嗣は藤原式家宇合の長男で、五異七能ありと称せられるほど非凡な才をもっていたが、言動に横柄さが目立ち、それを疎まれて大宰府に左遷されてしまう。これは天皇の近くで祈祷その他に携わっている玄昉と吉備真備がよからぬことを吹き込んだためだと怒り、天地の災厄の元凶であるのは、反藤原勢力の要である吉備真備と僧の玄昉であるとの上奏文を朝廷に送るが、聖武天皇はそれを受け入れず、広嗣は天平十二年（740年）、弟の綱手とともに大宰府の手勢や隼人などを加えた万余の兵を率いて反乱を起こした。結局広嗣は敗走し、最後は肥前国松浦郡で捕らえられ、同国唐津にて処刑された。この時期に疫病が非常に流行り、これは広嗣の祟りであるとされた。なお玄昉は天平十八年（746年）に死去したのだが、その死に様は、空に声がしてその身が突然消え、後日興福寺唐院に首が落ちてきたというものや、赤い衣を着た者が俄かに現れ玄昉を掴み取って空に昇り、その身を砕き落としたなど、尋常ではない話が流れ、玄昉は広嗣の怨霊によって祟り殺されたのだと伝えられた。また、吉備真備は天皇の命を受け広嗣の墓に慰撫に向かった所、広嗣の怨霊に襲われたが、得意の陰陽術で身を守り、難を逃れたとされる。

吉備真備は奈良時代の学者であり政治家、菅原

道真と同じく学者から立身して大臣まで進んだという極めて優れた知識人。また陰陽師でもあるとされ、陰陽術を用いて広嗣の霊を調伏したという。称徳天皇の崩御後、文屋清三を天皇に擁立しようとするが失敗し、その後清三の弟である文屋大市を立てようとするがまたしても失敗する。結局は白壁王(光仁天皇)が即位し、失脚（自ら辞職という形でだが）することとなり775年に薨去した。こうしてみると、比較的他の怨霊となった者達ほど悲劇的な最期ではなく、また怨霊として齎した災厄といったものはほとんどない。御霊となった理由は生前の数多くの偉業、伝説が影響していると思われる。

他戸親王は光仁天皇の皇子である。彼が廃された事件には母であり、光仁天皇皇后である井上内親王が関わってくる。宝亀三年（772年）、突如井上内親王が夫である天皇を呪ったという大逆容疑で皇后を廃されて、五月二十七日にはこれに連座する形で他戸親王が皇太子を廃される。更に翌宝亀四年（773年）十月十九日には井上内親王が難波内親王（光仁天皇の同母姉）を呪い殺したという容疑を受けて、他戸親王は母とともに庶人とされて、大和国宇智郡(現在の奈良県五條市)没官の邸に幽閉され、やがて宝亀六年（775年）四月二十七日、幽閉先で母とともに急死する（風聞では毒殺されたといわれている）。一連の事件は山部親王の立太子を支持していた藤原式家による他戸親王追い落としの陰謀であるとの見方が有力である。二人の死の翌年から天変地異が頻発し、山部親王の擁立に加担した者達が次々と死に、光仁天皇、山部親王も病に罹り、宝亀十年（779年）には周防国で親王の偽者が現れるなど二人の怨霊は大変な厄災を齎したとされた。桓武天皇は二人の怨霊、特に龍と化したといわれる井上皇后の怨霊を非常に恐れ、井上皇后に皇太后を追贈し、神に祀り、宇智郡一円を敷地にした。

崇徳院は八所御霊ではなく、時代も多少離れているが、強大な御霊の一人であるので、これも紹介しておく。鳥羽天皇の第一皇子として生まれたものの父には疎んぜられた。保安四年（1123年）鳥羽天皇に譲位され、五歳で皇位につくが、永治元年（1141年）に鳥羽上皇の強要により近衛天皇に譲位する。崇徳は自身による院政を期待してい

たが、鳥羽上皇の策略によって、院政を行なうことはできなくなった。保元元年（1156年）、崇徳は藤原頼長とともに白河殿に移り、平忠正、平家弘、源為義ら武士を召集して、生き残りを図るために武力で天皇方を倒そうと保元の乱を起こしたが、敗北し讃岐へと流された。讃岐にて崇徳は、五部大乘経（法華経・華嚴経・涅槃経・大集経・大品般若経）の写本作りに専念して、戦死者の供養と反省の証にと、完成した五つの写本を京の寺に収めてほしいと朝廷に差し出したが、呪詛が込められているのではないかと疑ってこれを拒否し、写本を送り返してきた。崇徳は嘆き怒り、自分の舌を噛み切って、その血で五つの写本全てに「三悪道に抛籠、其力を以、日本国の大魔縁となり、皇を取って民となし、民を皇となさん」（地獄・餓鬼・畜生の三悪道になげうち、五部大乘経の功力を以って、日本の大魔王となり、天皇を貶め、民に天下を取らせよう）と記し、海中深く沈めたという。そして長寛二年（1164年）に死去する。その死因は諸説あり、三木近安によって暗殺されたとも噂される。崇徳院はその死後、怨霊となって京に舞い戻り、数多くの祟りをなしたという。崇徳天皇の死後すぐに武士である平氏が権力を振るうが、その間に大火事が起こり、末期には叛乱が相次ぎ、更には養和の飢饉が起こる。そして平家の都落ち後の木曾義仲による暴虐と、京には凶事が連続した。やがて源平争乱を経て鎌倉幕府が成立、承久の乱で後鳥羽上皇を流刑に処するに至ると、朝廷ではいよいよ崇徳の祟りが起こったと恐れられたと言う。

こうして見ると、時の朝廷に対し、どの人物も謀反を起こし、流罪になり、その地で死亡しているのが共通点である。国家に対する大罪を犯したと見なされ、京都以外の地で死亡した人々で、その罪が冤罪であった人物が「御霊神」となったと思われる。「八所御霊」は特に政治的な要素の強い一部の御霊ではあるが、強い怨みを持って死んだ靈魂ほど強い怨霊と化す、生前・死後を問わず多くの崇拜、信仰を集めた存在は強力な存在になる、などの性質が見てとれる。そこで、怨霊となった後に御霊神へ、そこからさらに天神になり、今なお数多くの信仰を集め続けている、天神・菅原道真。他の御霊よりさらに一歩進んだ彼について

少々考察してみたい。

## 菅原道真

### i 幼少期の道真

道真の曾祖父古人は、もとは土師宿禰という名であった。奈良時代も末に近い天応元年（781年）六月二十五日、同族の道長ら十五人とともに、桓武天皇に願い出て、氏の名を居地に因んで菅原と改めることを許された。これが後に一大勢力となる菅原氏の誕生である。古人は学問をもって氏族の再興を志しており、菅原氏はその当初から学問の家としてあった。桓武新政にはじまる平安初期には旧来の氏族の体制は過去のものとなっており、大陸の文物をより多く吸収し、学問を修めたものが体制内で優位に立つことができる。道真の祖父、清公や父の是善は共に優れた学者として大成し、文章博士を務めた。こうした父、祖父を持って菅原家に生まれた道真の生涯歩む道は、決まっていたといってもよいだろう。

道真は承和十二年（845年）六月二十五日に是善の三男としてこの世に生を受ける。二人の兄は名も伝わらず、どのような人物であったのかわからないが、元慶五年（881年）の道真の詩に「我に父母なく、兄弟なし」とあるため早くに死去したようである。道真の幼少期の逸話に、十一歳のときに詩を詠んだというものがあり、道真自身が編集した『菅家文章』の巻頭に「月夜に梅華を見る」という題で収録されており、事実とみられる。なお全文は「月耀は 晴雪の如く 梅花は照星に似たりし 憐れむべし 金鏡転じ 庭上 玉房髻」となる。また、五歳の時に梅の花を見て、「うつくしや紅の色なる梅の花 あこが顔にもつたくぞある」と和歌をよみ、大宰府に行く時、自宅の紅梅殿で詠んだといわれる、こちらの真偽は定かでない。清公以来の菅原氏の私塾は菅家廊下と呼ばれ、その出身で文章生の試験に合格した者は百名近く、世間ではこれを登竜門とも呼んだ。道真はこの菅家廊下の継嗣として、初学の頃より重大な責任を負うこととなり、そのこともまた人生において重要な因子となっている。

### ii 官僚としての道真

道真は、貞観四年（862年）、十八歳の頃に文章

生に補せられた。当時、文章生二十人のうち学力優秀な者二名を選び、文章特待生として最高の国家資格である策試を受ける候補者としたが、道真は貞観九年（867年）正月にその文章特待生となり、翌月に正六位下野権少掾となる。貞観十二年（870年）、策試に合格し正六位上に叙せられる。ここから道真は怒濤の如く出世していくことになる。翌年には玄蕃助、さらに少内記に遷任。貞観十六年（874年）には従五位下となって兵部少輔に任じ、まもなく民部少輔に転じた。元慶元年（877年）に式部少輔となり、同年、文章博士を兼任することとなった。元慶三年（879年）、従五位上に叙せられる。元慶七年（883年）加賀権守を兼任。仁和二年（886年）、讃岐守に任じられ、式部少輔、文章博士、加賀権守の三官を辞めることとなった。これはかなり唐突な人事で、その事情として、学者間の対立抗争があったと推測される。寛平二年（890年）、道真は讃岐守の任を終え讃岐国より帰京した。翌年の寛平三年（891年）、絶大な権力を誇っていた藤原基経が死去したことで、藤原氏に有力者がいなくなり、これに乗り宇多天皇は藤原氏抑制策として道真の登用をはかった。道真は同年、蔵人頭・式部少輔・左中弁を兼務し、宇多天皇に近侍することとなった。寛平四年（892年）に従四位下に叙せられ、左京大夫を兼任。さらに翌年には参議となり、式部大輔・左大弁・勘解由長官・春宮亮を兼任。このとき宇多天皇は他の参議らとは相談せずに、道真一人に諮って多くの政策を成した。寛平六年（894年）、遣唐大使に任ぜられるが、道真の建議により、中国唐王朝の衰微がはっきりしてきたことと、往復の危険とを勘案し、遣唐使は停止された。この年の末に侍従を兼ね、翌寛平七年（895年）には従三位権中納言に叙任、春宮権大夫を兼任した。寛平八年（896年）に式部大輔を辞し、民部卿を兼任した。同年、宇多天皇は醍醐天皇に譲位したが、道真を引き続き重用するよう強く醍醐天皇に求め、藤原時平と道真にのみ官奏執奏の特権を許した。寛平九年（897年）正三位権大納言に叙任し、右近衛大将・中宮大夫を兼任する。昌泰元年（898年）に権大納言源光以下の納言が政務を放棄する事件が起きた。そして、この頃から少しずつ道真の異例の栄進に対する反発が表面化するようになっ

た。昌泰二年（899年）、右大臣に昇進し右大将を兼任。翌年には道真に対し閑白の詔が下ったが、道真はこれを固辞したといわれる。このときが道真の絶頂期であった。昌泰三年（900年）十月、文章博士三善清行は道真に書状を送り、右大臣の辞任を勧告した。その大意を述べると、「来年は辛酉に当り、変革動乱の年であるから、何事も慎重でなければならない。貴方は学者から出世して大臣の地位に上り、その栄誉は吉備真備のほかに並ぶ者はない。この辺りで止足の分を知り退隠し、後生を安穩と楽しまれるべきだ」などとなる。この書状については善意より道真を諭そうとしたという説や、続いて天皇へと送った、政変の警戒を促す書状と合わせて道真追放の為の算段であるという説などがあり、一概にどちらとは言えない。

### iii 菅原道真の左遷事件

明くる昌泰四年（901年）正月七日、道真は時平と共に従二位に叙せられたが、同月二十五日に突如として大宰権帥へと左遷される。そのときの宣命によると、道真は寒門の（学者の家柄で身分の低い）出身でありながら、急に大臣へと取立てられ、止足の分を知らず、専権の心を持って宇多上皇を欺き、廃立を行なって父子（宇多上皇と醍醐天皇）の慈を離間させ、兄弟（醍醐天皇と齊世親王）の愛を破ろうとする、これらは天下の知るところであるから、大臣の位を止め大宰権帥へと左遷する、とある。これは道真の娘が齊世親王の室であったことから、道真が醍醐天皇の廃位を企み、齊世親王の即位を謀ったとするものであった。道真左遷の報を聞いた宇多法皇は驚き、ただちに内裏に赴いたが、左右の諸陣が警固して通さない、法皇は草座を敷いて終日庭上で待ったが誰も門を開けず、晩景になって法皇は本院に帰還された。法皇の参内を実力で阻止し、天皇と法皇親子の対面を許さなかったのは、対面されては都合が悪い、道真左遷の詔勅を追求されては困るからであろうし、この左遷が明らかに道真の冤罪であり、強引なクーデターであると物語っている。

道真は追放の宣命をうけ、左衛門少尉善友・朝臣益友、左右兵衛の兵各一人に追いたてられて大宰府に向かった。このとき、幼い頃より親しんできた紅梅殿の梅に、「東風吹かば匂ひおこせよ梅

の花 あるじなしとて春な忘れそ」と詠いかけた。道真を慕った梅は、道真が大宰府に着くと、一夜のうちに大宰府の道真の元へ飛んで来たといわれている（飛梅伝説）。道真は、大宰府にいる間、得意とする詩文を以って自らを慰めた。それらの詩文は死の前に紀長谷雄に送られ、『菅家後集』として遺された。優れた詩集であり、それを通して大宰府での悲惨な生活ぶりも明らかになった。延喜二年（902年）にもなると次第に復歸の望みも薄れ、体調も崩し、赴任して二年後の延喜三年（903年）二月十五日に無念の思いを残しつつ亡くなった。遺体は当初、筑前国三笠郡四堂の辺りに葬ろうとされたが、途中牛車が急に動かなくなり、ここに埋めよとの意向と考え墓をつくった。後に安行の手で安楽寺が建立された。これが太宰府天満宮のはじまりとされている。

#### iv 怨霊となった道真

道真の死後まもなく、道真の霊が比叡山の法性房尊意の元に現れ、帝釈天の許しを得たので帝たちに復讐したい、邪魔はされるなど語ったといわれる。そしてその言葉通りに、道真の怨霊は猛威を振るうことになる。まず、延喜八年（908年）道真配流の首謀者のひとりであり、宇多法皇を内裏に入れなかった当時の建礼門の番人・蔵人頭の藤原菅根が雷に打たれ死去した。翌九年は春から疫病が蔓延し、道真配流の張本人たる藤原時平も病に斃れた。このときに道真の怨霊が現れたという話があり、

白昼菅公の霊が浄蔵の左右の耳から青龍となって出現し、清行に対し、むかしあなたの諫めを用いず官界から身を引かなかったので左遷の憂き目をみた、いま天帝の裁許をえて怨敵を懲らしめようとしているが、浄蔵が加持してそれを邪魔している。宜しく加持を止めさせてほしいと。そこで、浄蔵が父清行から誠められて加持を止め引下ると時平は死んでしまった。時平の家室は宇多法皇の妹であり、かつ浄蔵は法皇の弟子であったので加持中止を深く責められた。（『天神御霊信仰』）

というもので、もとは『扶桑略記』に記されていた。

延喜十三年（913年）には源光が死去。狩猟の

最中に底無し沼に馬ごと突っ込み、死体も見つからなかった。

延長元年（923年）醍醐天皇の皇太子、保明親王が二十一歳の若さで急逝。この頃から本格的に道真の怨霊の崇りとの噂が始まる。同年四月二十日に醍醐天皇は詔して道真の官を元の右大臣にもどし、正二位を追贈し、道真を左遷した昌泰四年（901年）正月二十五日の詔を破棄した。

延長三年（925年）六月七日、天皇がマラリアに罹り、十八日には保明親王の死後、醍醐天皇の皇太子となった慶頼王が五歳で死亡。

延長六年、七年（928～929年）にはまた疫病がぶり返し、死者が道に溢れる程だったという。治安も乱れ、宮中に鬼が跳梁跋扈している様が目撃された。

延長八年（930年）六月二十六日、干天に対する会議を清涼殿にて行っていたところ、にわかには雷鳴し、清涼殿の西南の第一柱の上に落雷した。殿上の間に侍していた大納言藤原清貫は胸を焼かれて死亡し、右中弁平希世の顔は焼けただれた。また紫宸殿にいた者のうち、右兵衛佐美努忠包は髪が焼けて死亡、紀陰連は腹部が焼けただれて悶乱、安曇宗仁は膝を焼かれて倒れ伏すというありさまであった。この事件が追い討ちとなり、醍醐天皇は病に倒れた。そして九月二十二日に寛明親王に譲位し、二十九日に崩御された。

天慶五年（942年）七月十二日、京都・西京七条二坊の多治比文子という娘の所に道真から託宣があり、「生前によく遊覧した、北野の右近馬場に自分を祀れ」というものであった。しかし文子には右近馬場に祠を建てる財力や伝手などないので、とりあえず自分の家の庭の片隅に祠を建てて菅原道真を祀った。その五年後、近江国比良宮の禰宜の神良種の子供の太郎丸にも同様の託宣があり、良種は右近馬場の朝日寺の最鎮に相談、文子と寺主の満増らと協力して社を建てる。この話を聞いた当時の右大臣、藤原師輔は天徳三年（959年）にその社を増築し、これが現在の「北野天満宮」となった。そして、ここから道真は天神として成長してゆくことになる。

#### v 天神信仰

日本の農耕信仰では、古くから北野の火雷天神

のような、天から降ってきた神を祀る天神社(古くから農耕民族にみられた天神信仰)が各地にあった。道真の御霊が火雷神と合体、同一視されることによって、やがて各地の天神社の祭神も道真＝天神様とされるようになった。

『道賢上人冥途記』の記述によると、清涼殿の落雷をはじめとする雷の災害は第三の使者火雷天気毒王の仕業で、その他諸々の天変地異や災害も、みな道真の眷属神であり、随従神の起こすところとなっており、道真は日本太政威徳天としてそれらの神々を統括する偉大なる神霊となっている。つまりはその怒りを鎮め、加護を受けることで、逆にあらゆる厄災から守ってもらえるということになる。

鎌倉時代頃になると、道真は時平の讒言にあい、生前冤罪に苦しんだことから、そうした悪を止め、正義を守る神である、という天神としての特色がでてきた。

道真から恐ろしい怨霊というイメージが薄れるにつれて、生前の学識、文才への敬慕が強まり、文道の神としての神徳が加わった。最初のうちは信仰の中心は貴族たちであったが、江戸初期に寺子屋が隆盛し、子供たちが机を並べる教室に、必ず天神様の尊像が掲げられるようになってからは、一般大衆にもその信仰は広く浸透した。ちなみに、永延元年(986年)、慶滋保胤が北野天満宮に捧げる祈願文の中で「天神を以て文道の祖、詩境の主」と語り、またその後の寛弘九年(1012年)、当時の文章博士、大江匡衡が同じく祈願文の中で「文章の大祖、風月の本主」と言った事から、この後、菅原道真は「雷神」ではなく「学問の神様」として祀られるようになり、今日もなお絶大な信仰を集め続けている。

### おわりに

ここまで怨霊となった者たちをみてきたが、私は非業の死を遂げた結果、御霊に「なる」、のではなく御霊に「した」というべきではないかと考える。この場合、怨霊を生み出すのは政敵を非業の死へと追いやった政治家(天皇)であり、その政争を見聞きした一般民衆である。冤罪を押し付け殺殺する。そのことに対する民衆からの非難や怒り、権力者自身の後ろめたさなど、様々な思い

入れが故人を怨霊として復活させる。もとより日本人は悲劇的な最期あるいは不遇の死を迎えた英雄を好む性向があるとされている。基本的に御霊となりうる人は文人なので「英雄」というイメージは沸きづらいが、無実の罪で追われた者が神となって復讐を果たすという話は、御霊信仰の受け入れやすさに一役買っていると思われる。また御霊信仰を政治的に見た場合、御霊を祀るという行為は権力者にとって、民衆の怒りを逸らす、自身の身を潔白とする、罪を雪ぐなどの意味合いがあると見受けられる。

今日の科学が発達した現代では怨霊の存在は、ほぼありえないものとされている。けれども御霊信仰自体が無くなったわけではない。例えば事故現場には花を供えるし、人が亡くなれば葬儀を行なう、縁起の悪いことが起こればお祝いもする。つまり、意味合いや形式が変わっても鎮魂の為の祭りは続いている。しかし、この先強い恨みをもって非業の死を遂げた人物が出てきても、その人物が御霊神となることはないだろう。その人物が御霊となって崇るといふ、ある種の「幻想」はせいぜいその人物と直接関わりのある人達にしきかけないからだ。あるいは一時的にならば多数の人々ともその「幻想」を共有できることもあるかもしれない。だが、すぐに消え去ってしまうような信仰では祀り上げられるような御霊は誕生しえない。御霊信仰は今後、消え去ってしまうことはないだろうが、かつてほどに社会的、政治的に重要な要素となることは二度とないであろうと私は結論づける。

### 参考文献

- 『現代人の宗教 6 命と鎮魂』1986  
御茶の水書房
- 『神社』日本歴史新書 1966  
原田敏明著 至文堂
- 『天神御霊信仰』1996  
村山修一著 塙書房
- 『天神信仰』民衆宗教史叢書 第四巻 1983  
村山修一編 雄山閣出版
- 『日本社会の史的構造 古代・中世』1997  
大山喬平教授退官記念会編 思文閣出版

- 『近世文学と信仰』 1981  
 諏訪春雄著 毎日新聞社
- 『信仰』講座 日本の民族7 1981  
 桜井徳太郎編 有精堂出版
- 『穢と大袂』 1992  
 山本幸司著 平凡社
- 『菅原道真』日本を作った人々 4 1978  
 高取正男著 平凡社
- 『日本靈異記』 1975  
 中田祝夫注 小学館